三重県埋蔵文化財調査報告　75

度会郡南勢町

田曽城跡発掘調査報告

1986. 3

三重県教育委員会

序

近年、各種公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は増加の傾向を辿り、文化財保護との円滑調整については、各開発部局の尚一層のご理解とご協力を求めているところであります。

田曽城跡は、国道260号改良工事に先立ち発掘調査を実施しましたが、15世紀から16世紀にかかる城跡の遺構の一部と、当時の遺物（生活用具）が数多く検出されました。志摩の南端にある当地域での城館の調査例はこれまでなく、今後さらに検討すべき点は多々ありますが、城の構造と生活、文化を知る上で貴重な資料を提供しました。

調査の推進にあたっては、県土木部道路建設課・伊勢土木事務所のご協力を、また現地にあっては、猛暑の中、南勢町教育委員会をはじめ、地元の多くの方々の惜しみないご援助があったことについて、文末ながら深甚の謝意を表します。

昭和61年３月

三重県教育委員会

教育長　横　田　猛　雄

例　　言

1．本書は、三重県度会郡南勢町字城山に所在する「田曽城跡」の発掘調査結果をまとめたものである。

2．発掘調査は、国道260号道路改良工事に伴って実施した。

3．調査は、昭和60年度に三重県教育委員会が三重県土木部の執行委任を受けて実施した。

4．調査体制は、下記のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県教育委員会事務局文化課　主事　高見宜雄

主事　稲垣良二

調査協力　三重県土木部道路建設課

三重県伊勢土木事務所

南勢町教育委員会

5．整理作業は稲垣があたり、報告書作成は、高見（Ⅰ章）、稲垣（Ⅱ～Ⅴ章）があたった。

6．本遺跡の遺跡略号は「９ＵＴＳ」で、遺構標示については、下記の略記号によった。方位は、すべて磁北を用いた。

ＳＡ；柱　列

ＳＤ；堀・溝

7.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　　言……1

Ⅱ　位置と歴史的環境……2

Ⅲ　遺　　構……4

　1．郭の構造について……4

　2．遺　　構……6

Ⅳ　出　土　遺　物……9

　1．ＳＤ２（土坑状部）出土遺物……9

　2．ＳＤ２埋土出土遺物……11

　3．ＳＤ３埋土出土遺物……12

　4．包含層出土遺物……13

Ⅴ　結　　語……15

　1．遺構について……15

　2．遺物について……15

　3．ま と め……16

図　版　目　次

ＰＬ１　航空写真・遺跡遠景
ＰＬ２　遺跡近景・発掘調査風景
ＰＬ３　ＳＡ１・ＳＤ２・ＳＤ４・ＳＤ３
ＰＬ４　Ⅵ郭・遺物出土状況
ＰＬ５　出土遺物
ＰＬ６　出土遺物
ＰＬ７　出土遺物

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡地形図
第３図　発掘区域図
第４図　調査前測量図
第５図　ＳＤ２・ＳＤ３土層断面図
第６図　遺構平面図
第７図　ＳＤ２（土坑状部）出土遺物実測図
第８図　飾り金具拓影
第９図　ＳＤ２・３埋土出土遺物実測図
第10図　包含層出土遺物実測図

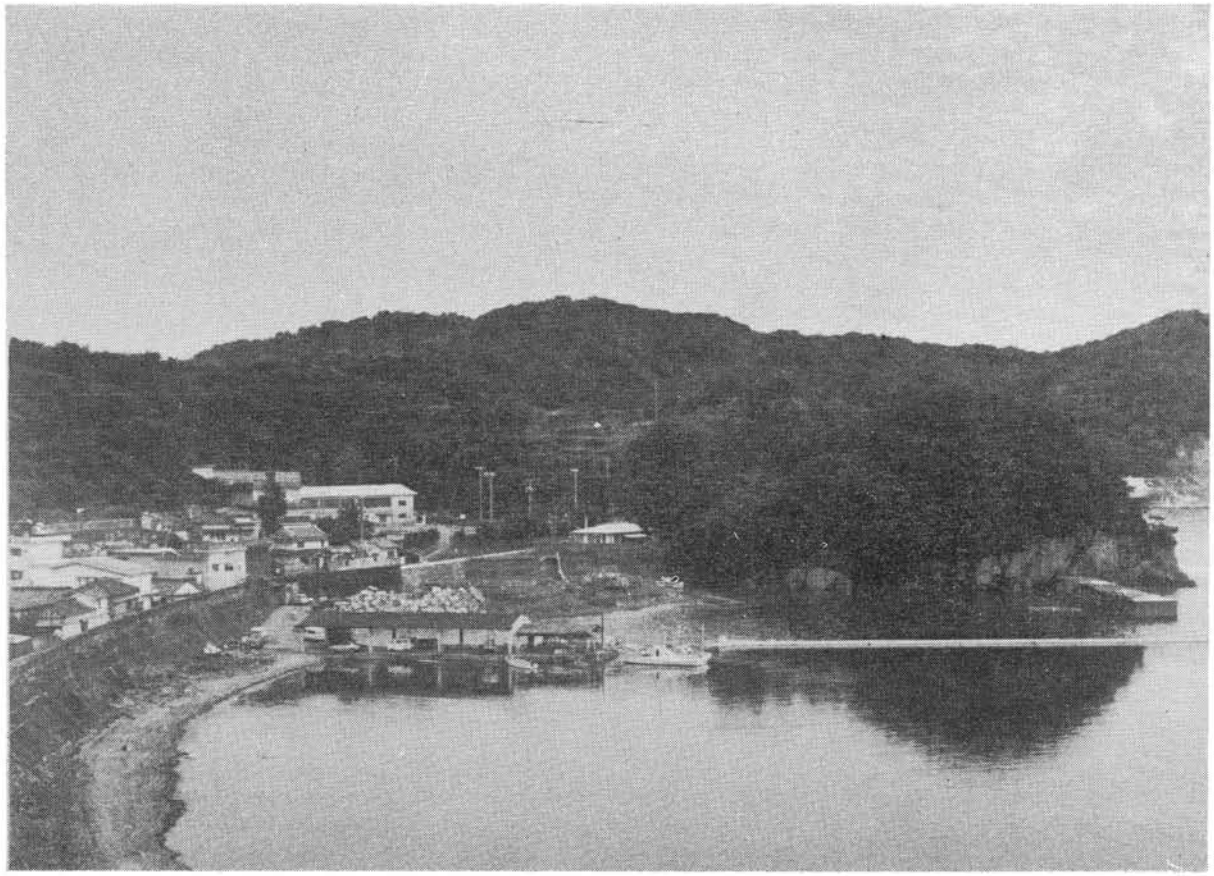
Ⅰ 前　　言

各種公共事業にかかる埋蔵文化財保護の問題は、年々増加の傾向にある。県教育委員会では、年度毎の事業計画を各開発担当課あて事業照会を行ない、遺跡所在の有無を確認し、その結果にもとづいて文化財保護に支障のないように工事計画を変更するよう要請している。

国道 260号は、志摩郡阿児町鵜方から志摩半島を縦貫して浜島町へ入り、度会郡南勢町・南島町を経由して、北牟婁郡紀伊長島町へ抜けるルートをとっている。しかし、この道路は各所で狭く、また大きく蛇行するなど、交通に支障をきたす箇所が随所に見られた。特に、南勢町田曽浦・宿浦地内は狭くなっており、大型車輛の対向が不可能な状態であった。県土木部では、地元の強い要望も入れ、バイパス建設を立案し、昭和58年度、文化課の事業照会に対し、回答したものである。

事業地内にあたる、当田曽城跡は、周知の遺跡として登録されており（遺跡番号　県：6725、町：79）、また、『三重の中世城館』（三重県教育委員会 1976年）にも紹介されいるものである。このように、古くから知られた城跡であるため、路線変更の要望を出したが、地形上の制約を受け、現状のまま保存することを断念せざるを得なくなった。そこで計画立案にあたった伊勢土木事務所との直接協議の結果、発掘調査を行ない記録保存することとなった。

昭和60年３月、田曽城に関する事前の地形測量を行ない、４月25・26日両日にわたり、範囲確認のための試掘調査を行なった。調査結果にもとづき、確認のためのトレンチを含め1200m²の発掘区を設定し６月24日～８月５日まで、現地での調査を実施するに至った。



II　位置と歴史的環境

志摩半島の南端、度会郡の東南部に南勢町はある。ほぼ中央に五ケ所湾を抱き、陸地が長い間に沈降し川や谷であったところまで海水が入り込んでできた溺れ谷があり、岬や入江の多い複雑なリアス式海岸を形づくっている。

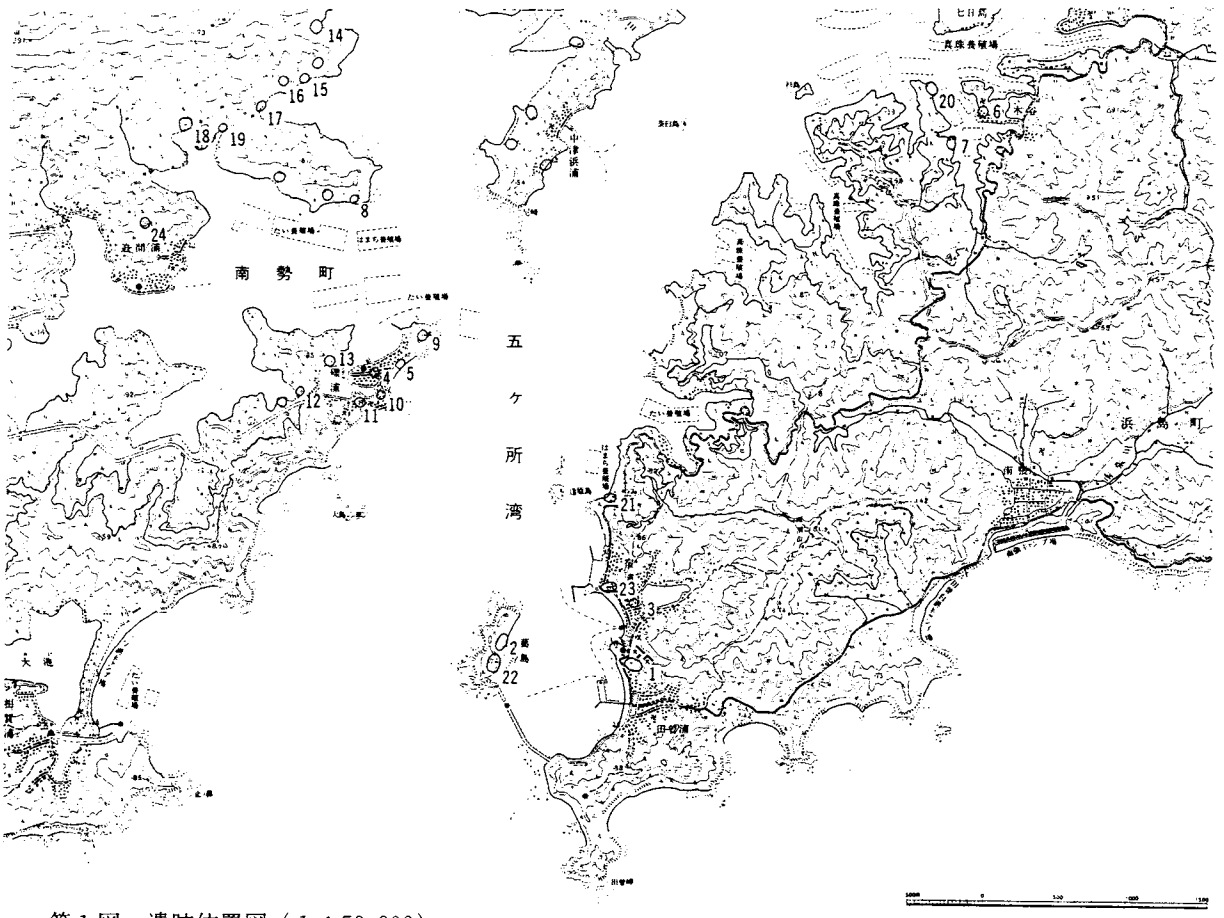
田曽城(1)のある南勢町田曽浦は、この五ケ所湾口の東側、湾口部に位置し、北は宿浦、西は約4km海を隔てて相賀浦、北西には葛島を望む。国道260号が海岸沿いを走り、交通の起点となっているが、近年までは海上交通が主流であった。田曽城は、宿浦との境に近い、宿田曽小・中学校の南の丘陵頂部・尾根上に立地する。標高30～35m前後であり、現況は畑地となっている。行政上は、南勢町田曽浦字城山に所在する。西が五ケ所湾、東は低い丘陵が連なり、北東には標高181.9mの浅間山もあり、自然の障壁をなしている。丘陵裾との比高差は20m前後である。

次に、周辺の遺跡について概観してみよう。

先土器時代から縄文時代にかけての遺跡としては、位置図には記載できなかったが、ナイフ状石器・掻器・尖頭器・石鏃などを出土した切原のナゴサ遺跡①や、ナイフ形石器・掻器・石鏃などを出土した船越のヒロサキ遺跡②があげられる。ヒロサキ遺跡では、黒曜石製の石鏃も見られ興味深い。

縄文時代では、船元Ⅰ式、爪型文の中期初頭の土器が発見された葛島遺跡(2)や、やはり中期初頭の五領ケ台式土器が発見された礫里中遺跡(4)がある。また、石斧を出土した木谷遺跡(6)、ビャクラク谷遺跡(7)のほか、宿浦遺跡(3)、ニワ浦遺跡(5)が知られる。

これらの中で、礫里中遺跡と宿浦遺跡は、弥生時代まで存続した遺跡である。特に、礫里中遺跡では弥生時代前期の遠賀川式土器、中期の朝日式土器・瓜郷式土器、さらに後期の土器も数点でており、貴重な資料といえよう。その他の弥生時代の遺跡とし



第1図　遺跡位置図（1：50,000）

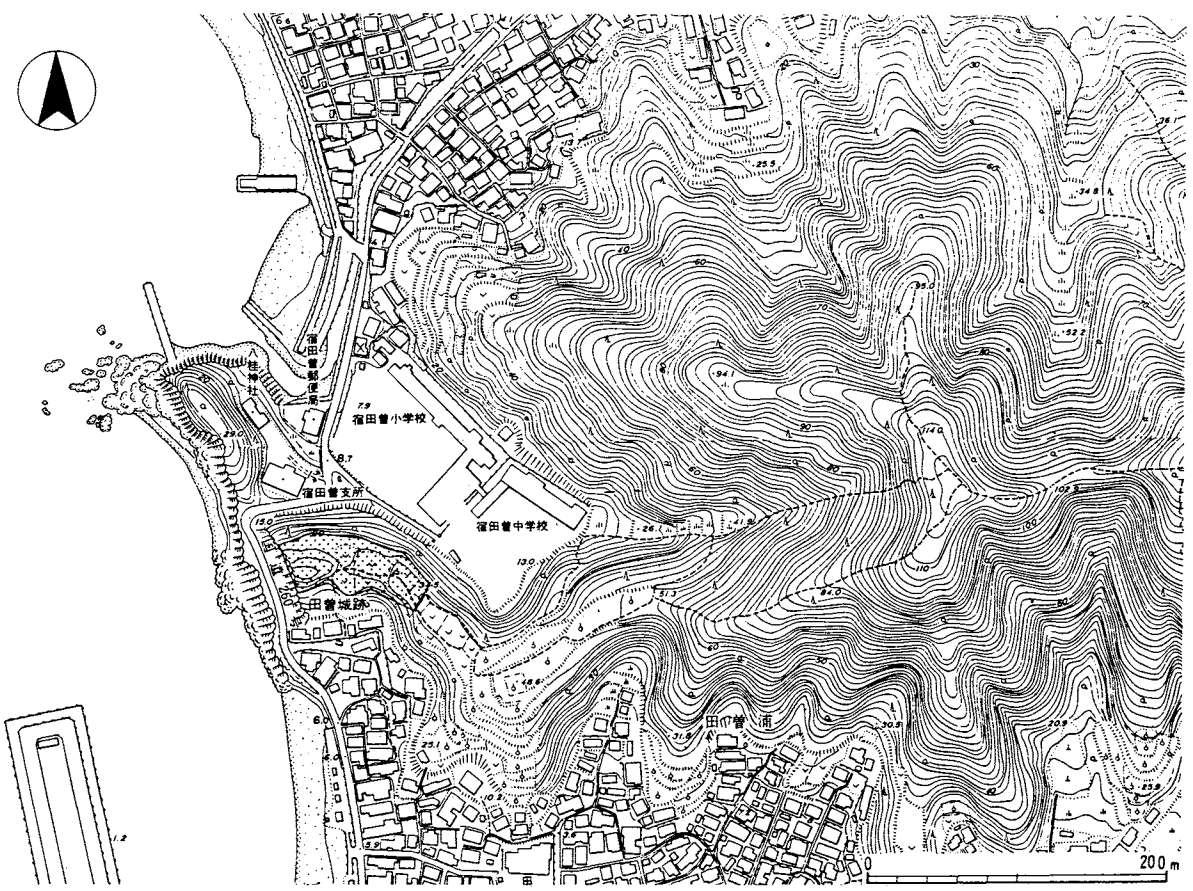
ては、かみど遺跡(8)が知られる。

古墳時代に入ると、5～7世紀にかけての円墳が諸処に見られるが、中でも後期の古墳が礫浦に集中し、五ケ所湾岸に見られる古墳の大半を占めている。南勢町最大を誇る径約16.5m、高さ約2.6mの浅間古墳(9)をはじめ、径約13m、高さ約3.5mの日和山古墳(10)、径約12m、高さ約3mの宮山古墳(11)、規模は不明であるが、宅地造成により、金環・土師器・須恵器類を出土した恋路古墳(12)、勾玉が拾われたという向山古墳(13)などがある。特に、昭和59年に関西大学考古学研究室が調査した宮山古墳では、全長90cmの環頭大刀が出土しており注目される。金銅板の装飾をもち、柄頭には玉を争う二尾の龍を配した金銅打ち抜きの環頭飾りがあり、鞘には円形文様が打ち出され、周囲に二重の列点をめぐらした金銅板が巻きつけてある。6世紀中葉から後葉、7世紀前葉、7世紀中葉と3次にわたり使用された古墳である。③ 他に遺物包含地として、道瀬の浜遺跡(14)、コタロ谷遺跡(15)、アクチ遺跡(16)、カタ遺跡(17)、中河内遺跡(18)、クビリ遺跡(19)、トコナギ遺跡(20)などが知られる。

その後、中世まではあまり知られず、宿浦ワダ遺跡(21)より山茶椀片が採集された程度にとどまる。

中世になると、愛洲氏の五ケ所城をはじめ、田曽城(1)、加津良島館(22)、花岡城(23)、迫間城(24)など、各地に城館を築き、土豪が割拠した。五ケ所城は、城・居館・集落と南北に並び、地形を巧みに利用した典型的な中世城館である。『太平記』や『難太平記』は愛洲氏が南朝方に属し活躍したことを伝えている。田曽城は北村家に伝わる『先祖書』などから、同氏の居館と伝えられ、北村氏はこの地の警固役に就いていたと思われる。同じ、田曽浦の葛島には、加津良島館があり、加津良島大夫房が居館としたと伝えられ、鳥羽の法楽寺領を侵略したことが『田中文書』に見える。愛洲主膳正良純が城主と伝えられる花岡城は宿浦にあるが、現在寺の境内となってその形跡はない。迫間城は、楠正勝が海賊防衛の為、浅間山に城郭を築いたとされるが遺構は確認できない。

このように、各集落に在地武士団が土着勢力として成立したが、これは愛洲氏とその一族であったと見られている。



第2図　遺跡地形図（1：5,000）

III　遺　　構

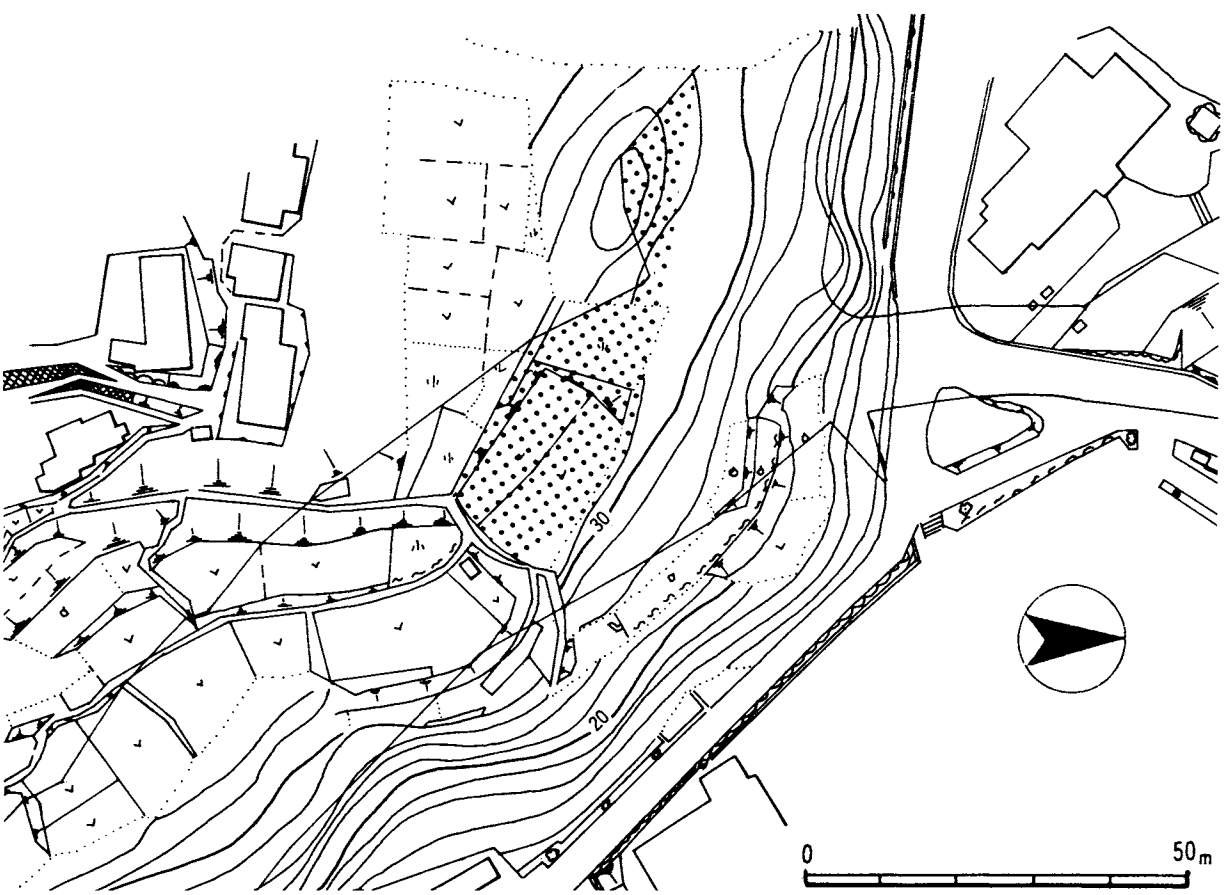
トレンチ調査を含め、工事路線内の削平される部分についての、約1200㎡を調査した。その結果、柱列１条、堀２条、溝１条などの他、ピット数個を検出した。柱列・ピットについては、時期を決定する資料はなかったが、堀・溝については城に伴うものと思われる。室町時代後期を中心とする時期であろう。以下、郭の構造、および各遺構について概述することにする。

１．郭の構造について

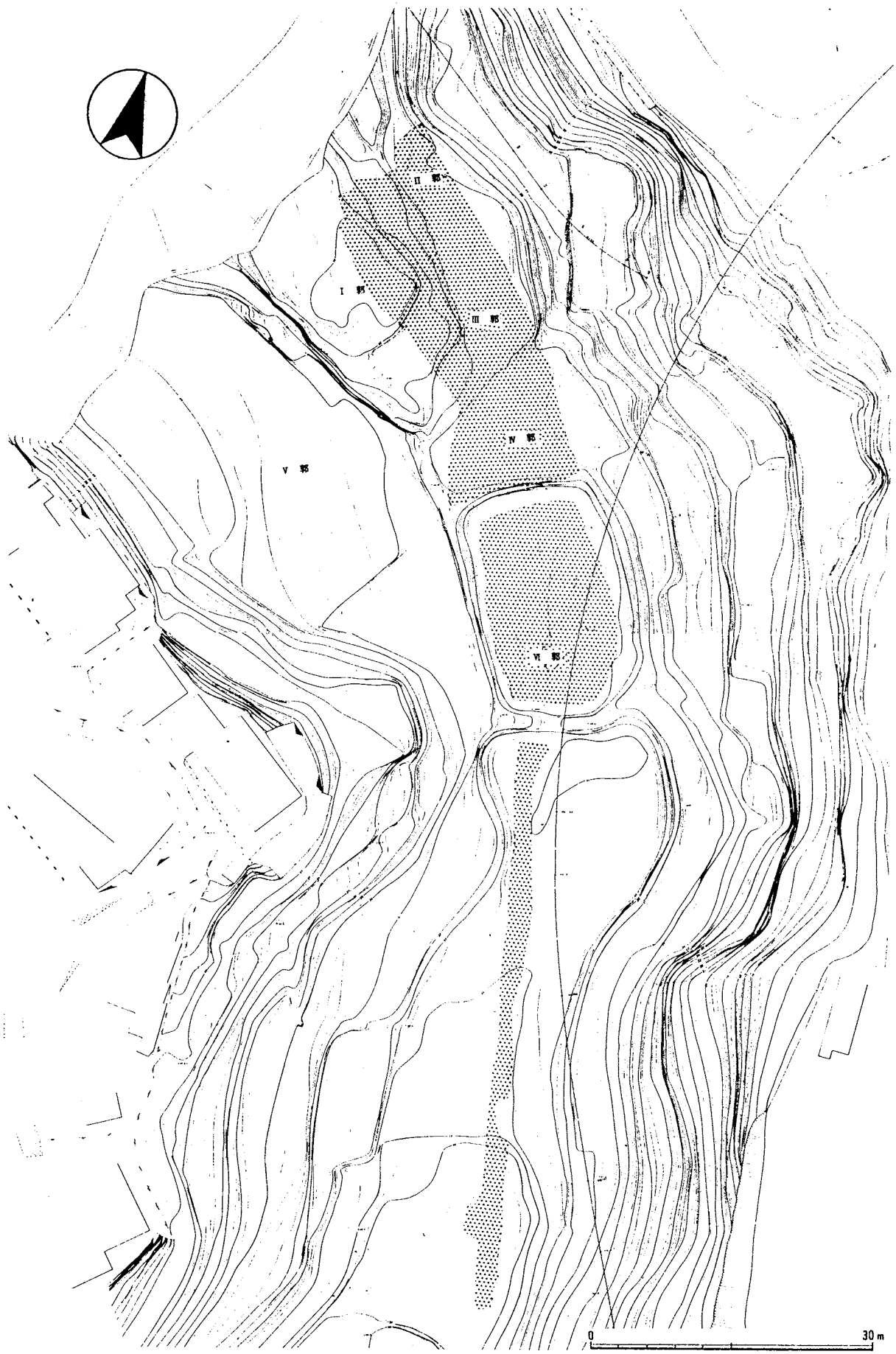
田曽城は、丘陵頂部から尾根上に立地する複郭の城である。尾根上一方向に郭を連鎖する連郭式を、さらに発展させたものと思われる。Ⅰ～Ⅵ郭に区分する。

Ⅰ郭は、標高約35ｍの丘陵先端の頂部にあり、北と東に堀がめぐる。西側は国道260号により既に削平され、南側は調査区外となっている。東西35ｍ以上、南北約18ｍの規模をもつものと思われる。調査の結果、柱列（ＳＡ１）と溝（ＳＤ４）を検出したが、ＳＤ４検出面で炭化層が一面に出ており、火災を受けたものと思われる。その後、整地を行ない再度城として運営したものであろう。ＳＡ１はここで検出している。土塁は、土層の観察から、東側に構築されていた可能性はあるが、北側は不明である。また、郭の北東端を北堀に向けてはり出させているのは土橋の可能性もある。

Ⅱ・Ⅲ郭は、Ⅰ郭の北側下方に帯状に構成されたものである。西からⅡ郭・Ⅲ郭と呼ぶことにする。Ⅰ郭との比高差は、Ⅱ郭までが約4.5ｍ、Ⅲ郭までが約3.5ｍである。Ⅱ郭は、標高30.5ｍ前後で、東西約13.5ｍ、南北約４ｍの規模をもつ。Ⅲ郭は、標高31.6ｍ前後、不定形で東に向けて広がるが、およそ東西11ｍ、南北７ｍの規模をもつ。Ⅱ・Ⅲ郭ともに、遺構・遺物は検出していない。



第３図　発掘区域図（１：1000）



第４図　調査前測量図（網目は調査区　１：600）

Ⅳ郭は、Ⅲ郭のさらに東側に広がる平坦地で、Ⅲ郭より0.5～１ｍ低くなる。尾根の鞍部となり、堀り切り的な機能を持ったものと思われる。また、Ⅰ郭へ通ずる道を集中させる機能もあわせもったものと考えられる。標高30～31ｍ前後で、東西約13ｍ、南北約12ｍの規模をもつ。遺構・遺物とも検出していない。

Ⅴ郭は調査区外であるが、Ⅰ～Ⅳ郭の南側に広がる平坦地である。Ⅰ郭との比高差は５～６ｍ前後である。標高29～30ｍ前後で、東西約35ｍ、南北約20ｍの規模である。田曽城の中で、最も大きな規模をもつ郭である。居館があった可能性もあると思われる。

また、Ⅳ郭の東側で２～３ｍ高くなった平坦地がある。これをⅥ郭とする。標高33ｍ前後、東西約22ｍ、南北約14ｍの規模をもつので、東側には堀り切りも確認している。遺構・遺物はともに確認していない。

以上のように、６つの郭で城を構成し、Ⅵ郭までを城の範囲と考える。これより東の尾根上には、確認のためトレンチ調査を行なったが、新しい耕作溝を検出したにとどまる。

２．遺　　構

(1) 柱　　列

ＳＡ１　２間分を検出した。柱間は約1.8ｍの等間である。柱掘形はすべて円形で、径は約25cmである。検出面からの深さは約20cmである。調査区が限られているため、規模あるいは性格など、詳細は不明である。火災焼失後の遺構と思われる。

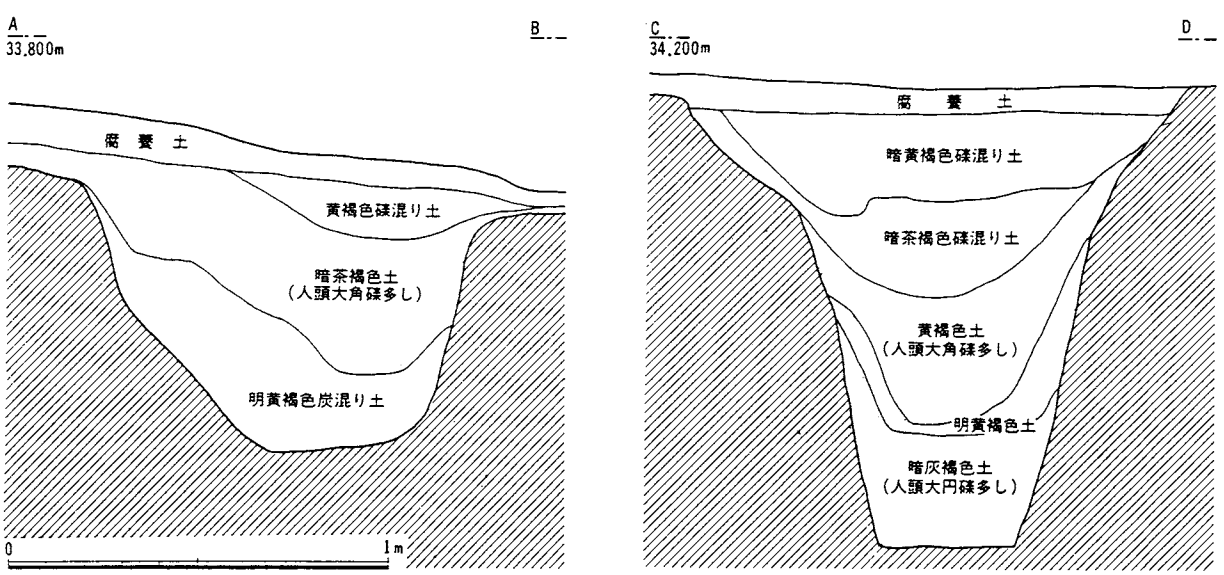
(2) 堀

ＳＤ２　Ⅰ郭の北側に切られた堀である。上幅 2.5～３ｍ、下幅1.1～1.6ｍ、深さ1.4ｍ前後を測る。断面が逆台形の箱薬研堀である。Ⅰ郭の北東端がはり出されたのに呼応して、堀もやや屈曲する。北側を土塁状に削り出し、上端は狭い平坦地をつくる。Ⅱ郭までの比高差は1.2ｍ前後である。また、堀底の東寄りでは土坑状の落ち込みがある。用途は不明であるが、この落ち込みから瀬戸産の灰釉盤・香炉・平椀を中心に、中国産の天目茶椀や、土師器皿・鍋・金属器等が出土している。

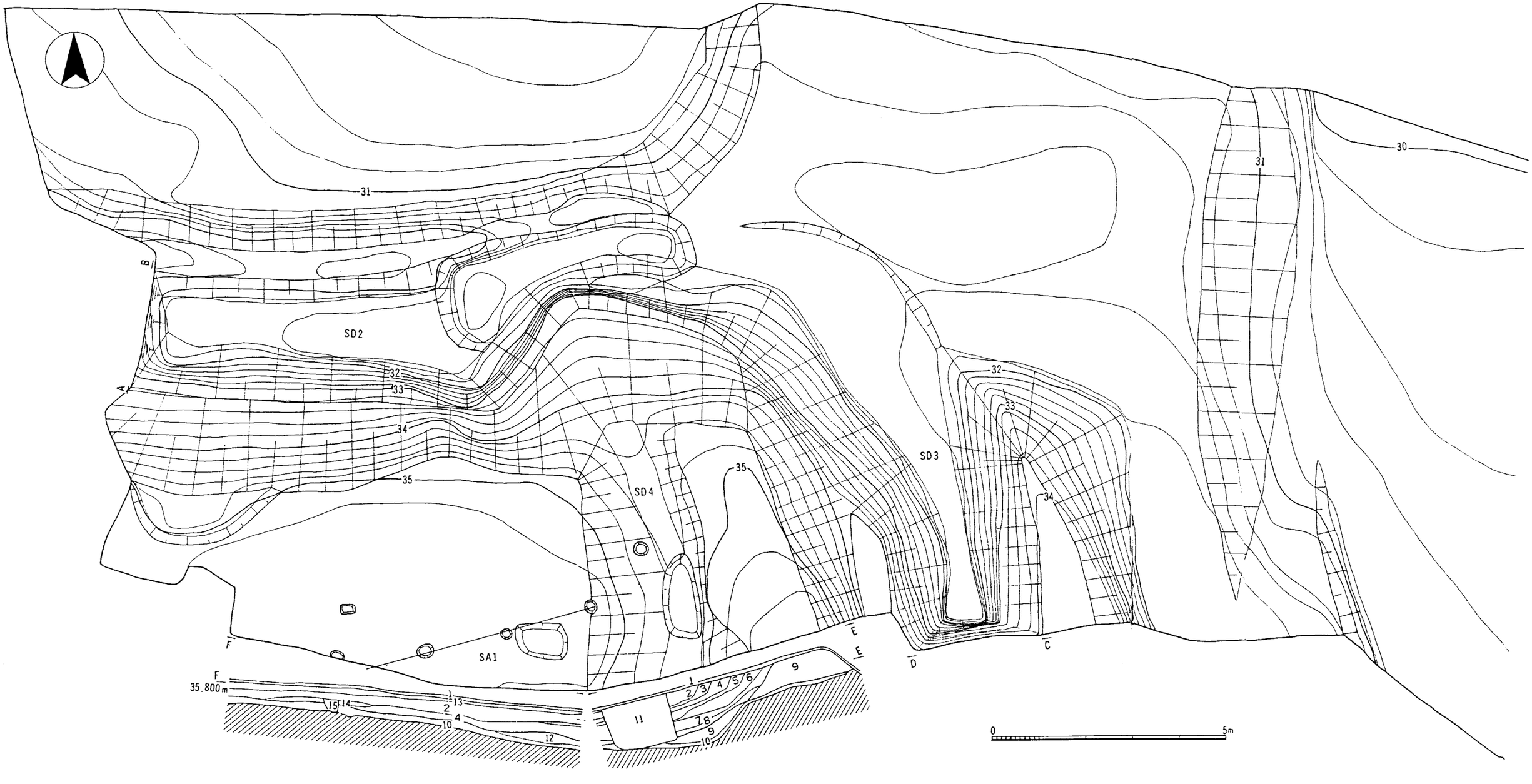
ＳＤ３　Ⅰ郭の東側に切られた堀である。上幅約３ｍ、下幅約0.7～２ｍ、深さ約2.2ｍである。やはり、断面逆台形の箱薬研堀である。Ⅰ郭寄りには犬走り的なテラスが見られ、東側は、ＳＤ２と同様、土塁状に削り出されている。

(3) 溝

ＳＤ４　Ⅰ郭の東寄りで検出された、南北に走る溝である。上幅2.5～3.5ｍ、下幅0.5～１ｍ、深さ0.8ｍ前後のＵ字溝である。土層の観察から火災焼失前の遺構と考えられる。内堀としての機能をもつかもしれない。



第５図　ＳＤ２(左)ＳＤ３(右)土層断面図（１：40）



第6図　遺構平面図（1：100）

Ⅳ　出土遺物

出土遺物は整理箱に30箱程度である。中世城館の出土遺物としては比較的多いと思われる。種類としては、土師器・陶器・磁器・瓦質土器・金属製品・石製品・古銭に大別される。室町時代後半の遺物が多く、中でも瀬戸産と思われる灰釉陶器と、常滑産と思われる甕がその大半を占める。以下、個々の遺物について概述することにする。

1．ＳＤ２（土坑状部）出土遺物

(1) 土師器

小皿（１～５）　口径7.6～8.0cm前後で、器高0.8cm前後の浅手のものと、1.3cm前後のやや深手のものとがある。口縁は不整円でいびつな形を呈し、粗雑なつくりである。口縁端部は斜め上方につまみあげた形で、断面が尖り先となる。内面はナデられ、外面は基本的に未調整でユビオサエによる凹凸や、指頭圧痕がよく残る。

胎土は良好で、（２）は白色砂、金雲母を若干含む。色調は、浅手のものは明るい乳白色、深手のものは淡い茶褐色を呈する。（１・３・５）はほぼ完形で、（２・４）は½程度の残りである。

皿Ａ（６～８）　口径10cm、器高３cm前後で、底部が平たく、口縁部が内弯ぎみに丸く立ち上がり、端部は尖りぎみとなる、器厚３mmの薄手の皿である。内面は丁寧にナデられるが、外面は未調整で、小皿同様、ユビオサエの痕が残る。

色調は明るい乳白色、胎土に２～４mmの白色砂を少量含む。½～⅓程度の残りである。

皿Ｂ（９～12）　口径13.6cm前後、器高 2.8cm前後の皿である。（９）は、底部から口縁部にかけて丸みをもち、端部は鋭く仕上げられる。他は、平たい底部から直線的に上外方に立ち上がり、口縁端部はやや内弯する。内面は丁寧なナデ、口縁部内面には若干のヨコナデがなされるが、以下は未調整でユビオサエの凹凸を残す。（10）のみ茶褐色、他は乳白色を呈し、胎土には白色砂を少量含む。（９）の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。残存は⅔以上である。

鍋Ａ（13）　口径21.6cm前後の口縁部の破片で、浅い形態の鍋である。体部から逆Ｌ字状に立ち上がる口縁部から端部が上方につまみ上げられ、断面三角形を呈する。口縁部の内外面はヨコナデされる。

胎土は良好で茶褐色を呈する。外面には煤が付着する。

鍋Ｂ（14・15）　口径22.6～22.8cmで、端部が内側に折り返される鍋である。口縁部がくの字状に外反し立ち上がり、ヨコナデを受ける。器面はやや摩耗している。

色調は（14）が暗茶褐色、（15）が暗乳白色を呈し、（14）は外面に煤が付着する。胎土に白色砂を少量含む。

鍋Ｃ（16・17）　くの字状に外反したのち、上方に屈曲し、受口状を呈する口縁部で、頸部の長い鍋である。端部は上方につまみ上げられ、断面三角形を呈し、ヨコナデされる。（16）は口径26.8cm、（17）はやや大きく口径32.2cmを測る。

色調は茶褐色を呈し、胎土に白色砂をわずかながら含む。

(2) 陶　器

天目茶椀（18）　口径11.6cm・器高 6.4cm・高台径 3.4cm前後の中国（明代）天目である。体部は、直線的に立ち上がり、口縁部が鋭く尖る。高台は削り出し内反り高台である。高台を除く全面に鉄釉がかかり、釉は非常に厚い。胎土は精良、焼成も良好である。⅓程度の残りである。

灰釉香炉（19）　口径10.8cm、器高 5.2cm前後の円筒型の香炉である。三足がつくものと思われる。口縁端部はやや内傾し、内側に面をつくる。外面はロクロ目が顕著である。底部外面には糸切り痕が残る。

胎土は精良、焼成も良好である。緑灰色の釉が底部を除く外面と口縁部内面にかかる。⅕以下の残りである。瀬戸産であろう。

灰釉皿（20）　口径12.0cmの縁釉皿である。やや大きめであるが、緑灰色の釉が口縁部の内外面にのみかかる。ロクロナデで仕上げられる。胎土・焼成ともに良好である。

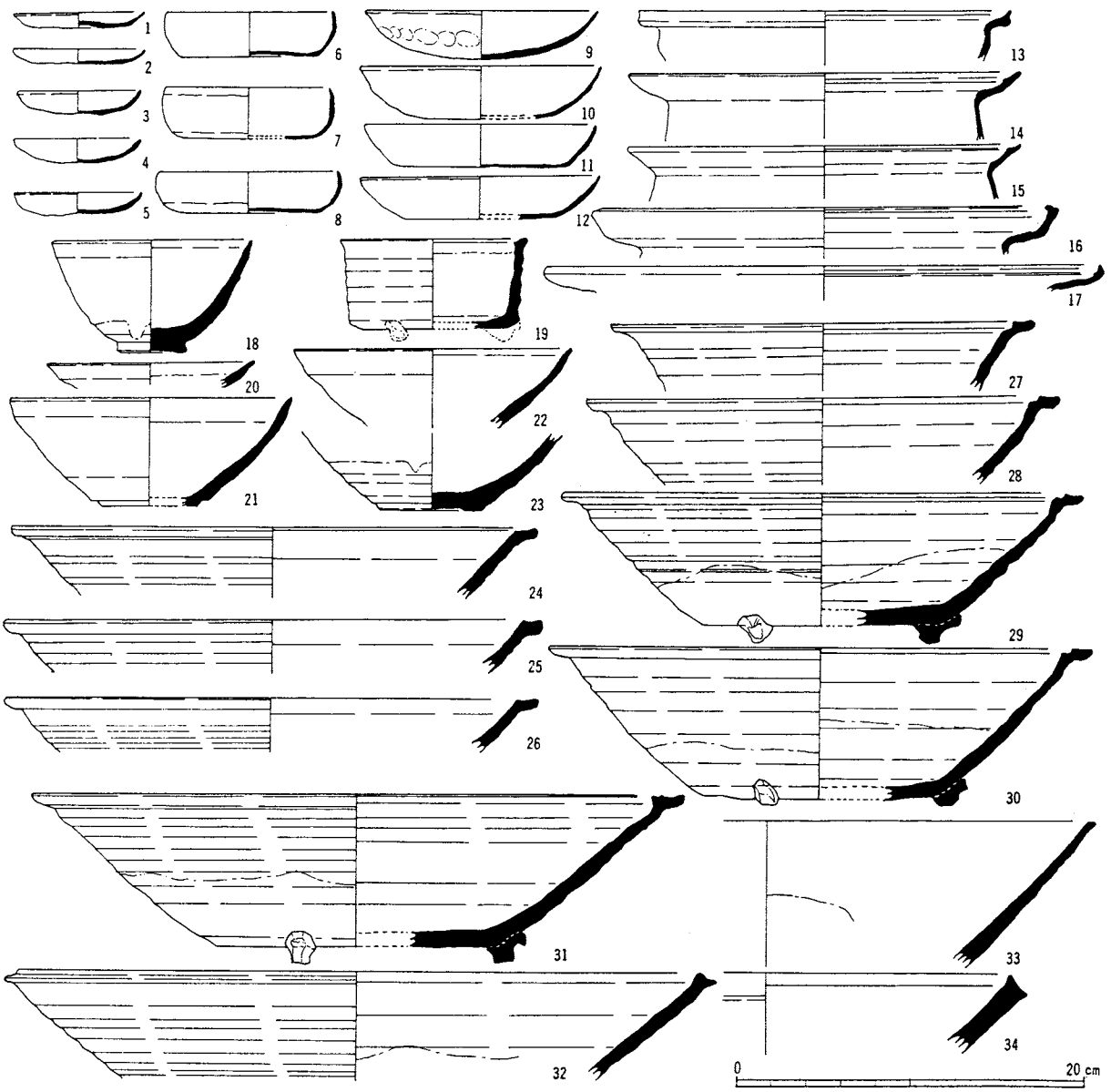
灰釉平椀（21～23）　口径16cm、器高6cm前後の平椀である。体部は直線的に開き、口縁部でやや内弯ぎみとなる。端部はやや肥厚して先端は尖る。高台は削り出し輪高台であるが、極めて浅く削っており、平高台と大差がない。ロクロナデで仕上げ、体部下半はヘラケズリが施される。内面には重ね焼き痕も見られる。

内面と体部上半に緑灰色の釉がかかる。胎土は精良で、焼成も良好である。½～⅓程度の残りである。瀬戸産であろう。

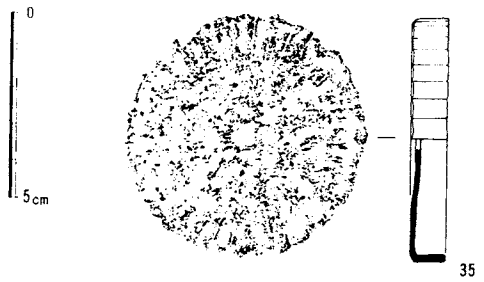
灰釉盤A（24～26）　口縁部が外方に水平につまみ出される盤である。口径30.6～31.0cmである。直線的な体部（24）、あるいは、やや丸みを帯びてのびる体部（25・26）からなる。次のB・C類とともに、内面は滑らかであるが、外面はロクロ目が顕著であり、三足がつくものであろう。全体に淡い緑灰色の釉がかかる。胎土・焼成は良好である。

灰釉盤B（27～31）　全体の形は、盤Aとほぼ同じであるが、直線的にのびる体部から口縁部は外方へ水平にのび、逆L字状を呈し、体部と口縁部の屈曲部（内面）に段をつくるものである。口径が、24.6cm前後の小型のもの（27）、27.4～31.4cmの中型のもの（28～30）、38.0cmを測る大型のもの（31）に分けられる。器高は、（29）が7.7cm、（30）が8.7cm、（31）が8.8cm前後である。

灰釉盤C（32）　口径が39.4cm前後で、直線的にの



第7図　SD2（土坑状部）出土遺物実測図（1：4）



第８図　飾り金具拓影（１：２）

びる体部から、口縁部は肥厚し、端部は内側に丸く、外方に短くつまみ出されるものである。

灰釉盤Ｄ（33）　口径39.2㎝前後で、体部は直線的にのび、口縁端部が丸くおさまるものである。胎土調整法は、Ａ～Ｃと同じであり、三足盤と考えられるが、内外面のロクロ調整痕はそれ程顕著ではない。Ａ～Ｄはすべて瀬戸産であろう。

捏鉢（34）　常滑産と思われる捏鉢である。口径26.4㎝前後で、直線的にのびる体部から口縁端部が上下方に肥厚し面をもつ。

胎土に細石を若干含む。焼成は良好である。暗赤褐色を呈する。

(3) 金属製品

飾り金具（35）　中心に方形の穿孔がなされる飾り金具の菊座である。径 6.5㎝を測る。一乗谷朝倉氏遺跡から類似品が出土している。④

以上、(1)～(3)と、紹介した遺物の他に、青磁椀（85・86）、青磁皿（87）も出土している。青磁椀は比較的大きいものと思われる。

2．ＳＤ２埋土出土遺物

(1) 土師器

皿Ｂ（36）　ＳＤ２（土坑状部）出土の皿と同一である。口径14.6㎝、器高 2.8㎝前後で、暗い乳白色を呈する。胎土に白色砂を若干含み、焼成はやや軟弱である。残りは⅓程度である。

皿Ｃ（37）　底部から口縁部にかけて丸みを帯び、口縁端部は面をもつやや厚手の皿である。口径15.0㎝、器高 1.8㎝前後で、非常に丁寧なつくりで、内外面をナデ、口縁部をヨコナデで仕上げている。

胎土に白色砂を含み、焼成は良好である。明るい茶褐色を呈する。江戸時代の所産であろう。

(2) 磁　器

青磁椀（38）　径 5.8㎝前後の高台部の破片である。高台内面を除いて、暗緑色の釉が厚くかかる。

胎土・焼成ともに良好である。

(3) 陶　器

山茶椀（39）　径 7.2㎝の高台部の破片である。貼りつけ高台で、もみがら痕を残す。底部外面は糸切り痕も明瞭に残る。胎土は比軟的良く、焼成も良好である。灰白色を呈する。

灰釉盤Ｄ（40）　口径25.2㎝前後である。胎土は良好、焼成は堅緻である。やや暗い緑灰色の釉がかかる。釉は若干剥落している。

灰釉卸皿（41・42）　直線的にのびる体部から口縁端部は上内方につまみ上げられる瀬戸産の卸皿である。口径17.0㎝、器高 3.5㎝、底部径10.5㎝前後である。ロクロナデで仕上げるが、底部から体部への立ち上がり部分がヘラケズリされる。底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。内面には格子状の卸目がつけられる。黄緑色の釉が口縁部の内外面にのみ施される。

胎土は良く、焼成も良好である。（41）は底部の破片であり、（42）は ⅙程度の残存である。

甕Ａ（43）　口径27.0㎝前後で、口縁部は折り返され、幅広の縁帯を形づくる常滑産の甕である。釉がモガケ状を呈する。

胎土に細粒砂を多く含む。焼成は良好である。茶褐色を呈する。

甕Ｂ（44～47）　甕Ａと同じ常滑産の甕であるが、口縁部の形状はやや異なり、端部は、Ｎ字状に折り返され、Ａ類に比べ大型である。体部から口縁部にかけて直線的にのびるもの（44・46・47）と口縁部で屈曲するもの（45）とがある。

胎土に白色砂を若干含み、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈する。甕Ａに先行するものと思われる。

壺（48）　口縁部が折り返され、やや幅の狭い縁帯をつくる、甕Ａと同様の常滑産の壺である。口径13.0㎝前後である。

胎土に白色砂を含む。焼成は良好である。暗い茶褐色を呈する。口縁部から頸部にかけての破片で、½程度の残りである。

捏鉢（49）　直線的にのびる体部が口縁端部で上下

に肥厚するものである。小破片のため口径は不明である。

胎土に白色砂を含む。焼成は良好である。赤褐色を呈する。

(4) 瓦質土器

火舎（50）　肩部が大きく張り出し、扁平球状の体部を有する火舎である。口径32.6cm、器高 6.4cm前後で、口縁上面は平坦な面をつくる。口縁外面には、雲形のスタンプによる装飾模様が施される。

胎土には白色砂を含み、焼成は良好である。淡い褐色を呈する。⅓程度の残りである。

(5) 石製品

臼（51）　茶臼の下臼と考えられる、粉受け用の皿部分の破片で、径32.8cm前後である。

3．ＳＤ３埋土出土遺物

(1) 土師器

皿（52）　口径13.7cm、器高 2.3cm前後である。外面は未調整でユビオサエによる凹凸が若干残る。

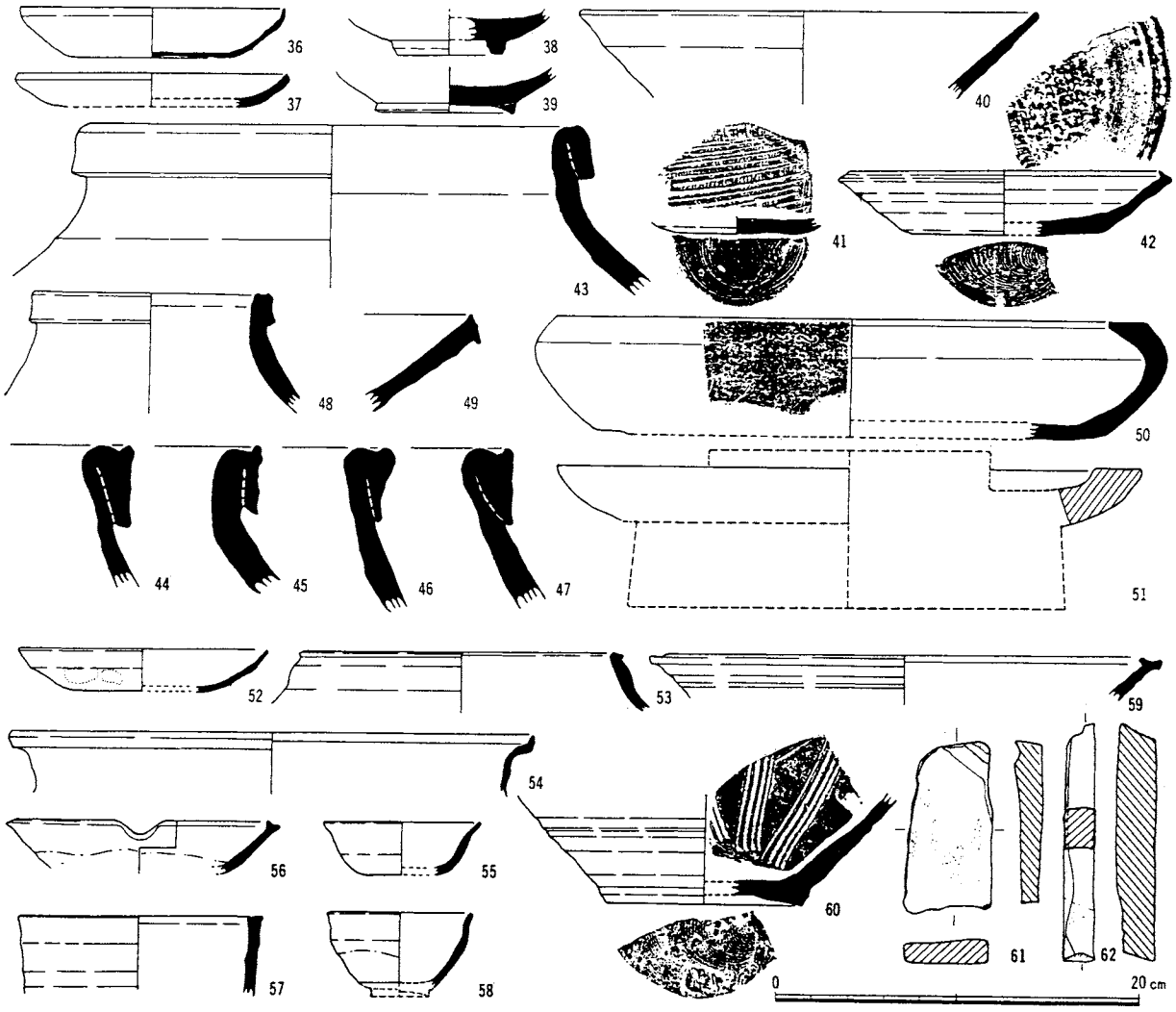
胎土・焼成はともに良好である。乳白色を呈する。

茶釜形土器（53）　口縁部は内傾して立ち、端部は外方に肥厚するものである。肩の張る扁平球状の体部をもつと考えられる。口縁部は内外面ヨコナデされる。

胎土に砂粒を多く含む。焼成はやや軟弱で、色調は茶褐色を呈する。口縁部の破片である。

鍋Ａ（54）　ＳＤ２（土坑状部）の鍋（13）と同形態であるが、口径がひと回り大きく、28.8cm前後である。直線的にのびる体部から口縁部が短く外反し、端部は上方につまみ上げられ、断面三角形を呈する。外面は摩耗により調整は不明である。内面はナデ、口縁部はヨコナデされる。

胎土・焼成ともに良好で、茶褐色を呈する。



第９図　ＳＤ２・３埋土出土遺物実測図（１：４）

(2) 磁　器

白磁小椀（55）　底部を欠損するが、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反する小椀である。口径 8.8cm、器高 2.9cm前後である。

胎土・焼成ともに良好で、灰白色の釉がかかる。⅓程度の残りである。

(3) 陶　器

灰釉卸皿（56）　直線的にのびる体部から口縁部は両側に肥厚し、内上方につまみ上げられるもので、口径14.0cm前後の片口の卸皿である。緑灰色の釉が内外面とも体部下半までかけられている。

胎土・焼成ともに良好である。⅙程度の残りで、底部を欠損する。

灰釉香炉（57）　口径13.4cm前後の円筒型の香炉である。内面は平滑に仕上げられ、外面にはロクロ目が目立つ。やや大きめであるが、ＳＤ２（土坑状部）の香炉（19）と形態的にはよく似ている。緑灰色の釉が、内面の体部上半から外面にかかる。

胎土・焼成ともに良好である。口縁部から体部にかけての破片である。三足がつくものと思われる。

天目茶椀（58）　口縁部はわずかに外反して立ち、端部は丸くおさまる小型の天目茶椀である。口径7.8cm前後、　高台部を欠損するため不明であるが、およそ4.6cmの器高であろう。高台に近い部分にわずかながらヘラケズリの痕が見られる。削り出し高台がつくものであろうか。内外面の体部上半にかけて鉄釉がかかる。

胎土は精良で、焼成も良好である。⅕以下の残存である。

擂鉢（59・60）　口縁端部が外方へ水平につまみ出され、内側には突起状のかえりをもつ瀬戸産の擂鉢である。体部外面にはロクロ目が顕著に残り、ともに胎土は精緻、焼成も良く堅く焼き締まっている。（60）の内面の擂目は櫛状工具によって、１単位４条で下方から上方へかき上げられ、また、底部外面には糸切り痕が明瞭に残る。

(4) 石製品

砥石（61・62）　（61）は長さ９cm、幅3.7～4.5cm、厚さ 0.9～1.4cmである。斜めに0.8cm程度の幅で溝が切られている。（62）は長さ12.4cm、幅 1.7cm、厚さ２cm前後である。

4．包含層出土遺物

(1) 土師器

鍋Ｄ（63）　鍋Ｂに似るが、口縁端部が上方につまみ上げられ、断面三角形を呈する、口径21.0cm前後の小型品である。

色調は黒褐色で、煤が付着する。胎土・焼成ともに良好である。口縁部の破片。

(2) 磁　器

白磁椀（64）　高台径 3.0cmの小型の椀である。断面逆台形の高台が短く削り出され、高台外面は稜をもつ。白色の釉が体部下半まで薄くかけられる。

胎土は精良。焼成は良好である。

(3) 陶　器

山茶椀（65）　高台部分のみの破片である。高台径 7.6cm前後で、断面逆台形の高台がやや外開して貼り付けられる。もみがら痕も見られる。内面には自然釉がかかる。

胎土に最大径４mmの白色砂を含む。焼成は良好である。暗灰白色を呈する。

灰釉皿（66）　やや腰を張った体部から、口縁端部がわずかながら外反しながら立ち上がる、高台付きの皿である。口径12.6cm、器高 2.1cm、高台径 6.6cm前後である。高台は断面方形を呈し、八の字形にひらく。ロクロナデで仕上げ、底部から体部上半にかけてはヘラケズリが施される。内面には、かさね焼き痕も見られる。釉は口縁部に３回つけがけされるようである。

胎土には、１～４mm程度の白色砂を含む。焼成は良好である。くすんだ灰色を呈する。口縁部が½欠損する。

天目茶椀（67）　口径 8.8cm前後、器高は４cm程度になり得るであろう。直線的な体部がやや鋭く内弯し、端部は外反する。外面と内面の上半部に鉄釉がかかる。

胎土・焼成とも良好である。約⅕の残りである。

捏鉢（68）　（34・49）と同様、口縁部が上下に肥厚するものである。胎土に白色砂を多く含む。焼成は良好である。淡い赤褐色を呈する。

擂鉢（69・70）　（69）は口径が24.8cm前後である。直線的な体部が口縁部でやや細くなり、端部は外方

へ水平につまみ出される。（70）は口径が22.0cm前後である。直線的な体部が外方へ水平につまみ出され、内側は突起状のかえりをもつ。ともに内面は滑らかであるが、外面はロクロ目が非常に顕著である。

胎土は精緻・焼成も非常に良く堅く焼き締まっている。口縁部の破片である。

灰釉香炉（71）　口径15.6cm前後と大きい。形態的には、（19・56）と同様である。口縁部の破片である。暗い緑灰色の釉が外面と内面上半部にかかる。

胎土は精良。焼成は良好である。

灰釉盤A（72）　口径28.0cm前後である。体部下半を欠くが⅙程度の残りである。胎土は精・焼成も良好であるが、釉は若干剝落している。

甕B（73～76）　口径は、（73）が36.0cm、(74)が39.8cm、（75）が41.8cm前後である。口縁部がN字状に折り返されて体部と密着するものである。肩部に押印花文（76）がみられるものもある。

胎土に白色砂を多く含む。焼成は良好である。暗褐色ないし黒褐色を呈する。

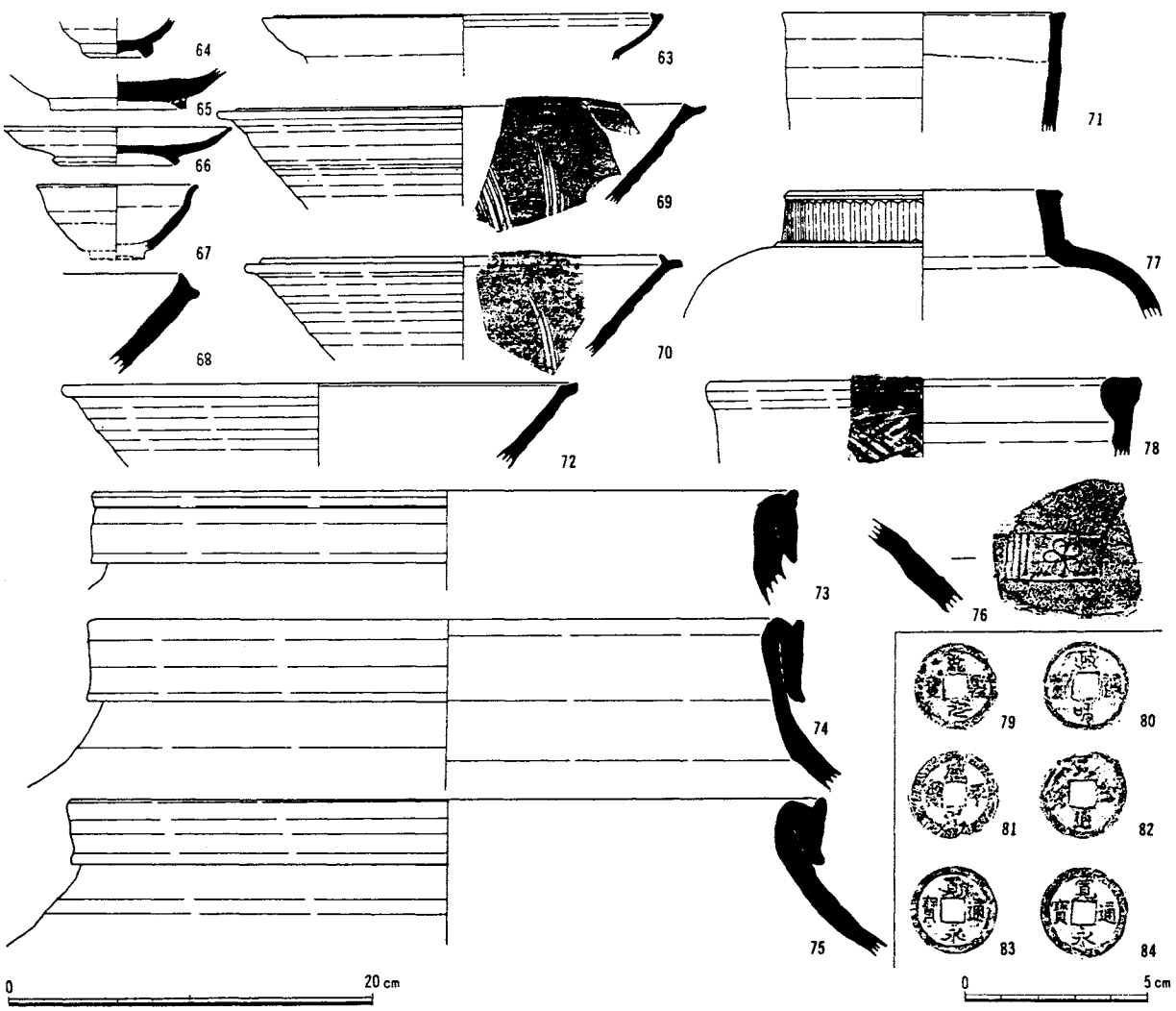
(3) 瓦質土器

火舎（77・78）　（77）は口径14.8cm前後である。丸い肩部から口縁部がほぼ直立する。やや厚手のものである。口縁部には、断面鋸歯状文が施される。明るい乳白色を呈する。

（78）は、口径23.8cm前後である。ほぼ直立した体部が、口縁部で丸く内側に肥厚し、体部上半に斜格子状の沈線文が施される。くすんだ灰褐色を呈する。

(4) 古　銭

古銭は14枚出土している。そのうち比較的残りのよい6枚について報告する。（79）は紹聖元宝（初鋳1094年）、(80）は政和元宝（初鋳1111年）、(81）は咸平元宝（初鋳998年）、（82）は元豊通宝（初鋳1078年）で、すべて北宋銭である。（83・84）は寛永通宝（初鋳1624年）である。



第10図　包含層出土遺物実測図（79～84は1：2、他は1：4）

V 結　　語

南勢町における発掘調査例は少なく、かつて、昭和50年度に切原のナゴサ遺跡⑤、迫間浦の道瀬遺跡⑥、昭和51年度に五ヶ所浦の万度盛塚⑦が調査され、近年においては、昭和59年度に礫浦の宮山古墳⑧、五ヶ所浦のヒロサキ遺跡⑨が調査されたのにとどまる。中世城館の調査にいたっては皆無であり、分布調査による表面観察の略測図によって知るのみである。こうした観点から、今回の調査は中世城館のみならず南勢町の文化財を知るうえで貴重な資料を提供したといえよう。

南勢町には、のろし場跡を除き現在14の中世城館が分布しており、そのほとんどが丘陵や尾根上に築かれている。これは、平坦地が少なく岬や入江の多いリアス式海岸を形づくる南勢町の地形的特徴によるものであろう。田曽城も、五ヶ所湾口の眺望のきく丘陵頂部、尾根上に立地し、標高30～35mを測る。室町時代後期を中心とする城館と考えられ、城域は、調査区外も含め、およそ2000m²と考えている。

以下、遺構・遺物等について若干の要点をまとめ結語としたい。

1．遺構について

田曽城はⅠ～Ⅵ郭の6つの郭から構成されるが、こうした郭を多くもつ中世城館は南勢地方に多い。

Ⅰ郭は、郭の中で最も高所で、眺望のきく丘陵先端にある。物見の郭としての機能をもつものと考えられる。Ⅰ郭で確認した遺構としては、柱列（ＳＡ１）、溝（ＳＤ４）がある。城の時期は2期に分かれ、前述したとおり、ＳＤ４検出面で炭化層が一面に検出されており、火災にあったものと思われる。その後整地し、城として再度利用したものであろう。ＳＤ４が火災消失前の、ＳＡ１が消失後の遺構である。ＳＡ１は調査区が限られているため不明であるが、掘立柱建物か、あるいは柵・塀の可能性もある。時期を決定する資料がなく、城に伴うものかは不明である。また、土層の観察から、Ⅰ郭の東側に土塁の可能性を述べたが、その痕跡の下層に炭化層があり、城の第1期目には少なくとも存在しなかったものと思われる。

堀については、北（ＳＤ２）と東（ＳＤ３）で確認している。ともに、人頭大の円礫・角礫が多数落ち込んでおり、Ⅰ郭にはりつけた石垣が崩れ落ちたものと思われる。Ⅰ郭北斜面には、その痕跡も見られた。また、南斜面は堅い岩盤であり、ＳＤ３は南へはめぐらないものと思われる。

2．遺物について

Ⅰ郭とそれをめぐる堀からのみの出土であるが、中世城館の調査例としては比較的多数の遺物が出土した。日常雑器類がほとんどであるが、中でも常滑産の甕や、瀬戸産の灰釉陶器が大半を占め、土師器皿、鍋類は比較的少量であった。羽釜類も細片をわずかに1片検出しただけである。また、茶道具としての天目茶椀も他の中世城館に比して少ない。これは、Ⅰ郭が物見の郭としての性格をもち、日常的な生活空間が別にあったためと思われる。田曽城ではこの空間としてⅤ郭を想定した。以下に土師器・陶器を中心に遺構ごとに整理し、時代観を追ってみたい。

○ＳＤ２（土坑状部）出土遺物

土師器は、皿と鍋だけである。皿は小皿（1～5）、皿Ａ（6～8）、皿Ｂ（9～12）に、また鍋は、Ａ（13）、Ｂ（14・15）、Ｃ（16・17）に分類した。皿Ｂはやや地域色を帯びるかも知れないが、他は南勢地方に普遍的に見られる形態である。皿の編年観は、県下を包括した形では確立されておらず、ここでは、伊勢型鍋の編年を見ることにする。新田編年⑩によれば、鍋Ａ・ＣはⅥ－７類（16世紀代）、鍋ＢはⅥ－６類（15世紀代）に比定されようか。純粋な一括遺物とはいえないが、皿もこの編年観と大幅にくい違うことはないと思われる。

陶器は、全体の出土状況から見ても最も出土量が多く、また器種も豊富である。灰釉陶器・天目茶椀・捏鉢が出土している。

灰釉陶器は、香炉（19）、縁釉皿（20）、平椀（21～23）、盤（24～33）が出土し、すべて瀬戸産と

思われる。縁釉皿については不明だが、他は瀬戸の小長曽窯、山口八幡２号窯、笹窯出土のものに極似し、15世紀前半から中葉にその時期を求められよう。[11] 盤は口縁の形態からＡ～Ｄに分類したが時期差はほとんどないものと思われる。また、これらの盤のほとんどがこの土坑状部出土であり、逆に、ここからは、常滑産の甕は１点も出土していないのは興味深い。今後の検討課題である。

天目茶椀（18）は、口縁が鋭く、釉は厚くノギ目状を呈し、高台が削り出し内反り高台の中国産のものが出土し注目される。

捏鉢は常滑産で、口縁部が上下に肥厚し平坦面が幅広になるものである。常滑編年[12]のＶ期後半（16世紀前半）に位置づけられよう。

○ＳＤ２・３埋土出土遺物

土師器は、皿Ｂ（36・52）の他に皿Ｃ（37）が出土しているが、胎土も良く、赤褐色を呈した丁寧なつくりのもので、江戸期に入るかも知れない。鍋Ａ（54）も出土している。

灰釉陶器は、盤Ｄ（40）、香炉（57）の他に卸皿（41・42）がある。やはり瀬戸産のもので、15世紀前半から中葉に位置づけられるであろう。

また、同じ瀬戸産のもので擂鉢(60)がある。胎土が緻密、焼成も良好で堅く焼き締まっている。灰釉陶器同様、15世紀前半から中葉に求められる。

常滑産のものでは、ＳＤ２（土坑状部）出土と同じ16世紀前半と考えられる捏鉢（49）の他に、甕・壺がある。甕はＡ（43）とＢ（44～47）に分類した。甕Ａは口縁部が折り返され、幅広の縁帯が体部に密着し、口縁上端が平坦面を見せるもので、常滑編年Ｖ期後半（16世紀前半）に位置づけられよう。この甕は釉がモガケ状を呈するのも特徴のひとつである。甕Ｂは、Ｎ字状口縁を呈し、口縁部が体部に密着するものである。Ｖ期後半（16世紀前半）におさまるものと思われる。壺（48）は資料に乏しく不明だが、15世紀後半の所産であろう。

これらの他には、小天目（58）が出土しており、大窯Ⅱ期[13]（16世紀前半～中頃）のものと思われる。

以上、遺構に伴う土師器、陶器について見てきたが、包含層出土のものも、その形態から同時期におさまるであろう。ただ、特筆すべきこととして、炭化層直上で焼けた形で出土した常滑産の甕があげられる。剥離が激しく図化できなかったが、Ｎ字状口縁の口縁部と体部の間にすきまのあるもので、甕Ｂに先行するものと思われる。Ｖ期前半（15世紀後半）と考えている。

他に、ＳＤ３　および包含層から出土した灰釉皿（66）、山茶椀（39・65）があるが、平安時代末から鎌倉時代にかけての築城以前の遺物であろう。

３．まとめ

出土遺物から勘案して、築城時を15世紀前半と考え、16世紀中頃までは少なくとも存続していたであろう。火災消失前後で２期に分かれるが、炭化層直上の甕から15世紀後半に１度消失したと思われる。その後、比較的早く再建したようである。『先祖書』に、「一、北村勘解由左衛門、田曽城ニ罷在候」とあり、また、治部大輔教忠が北村勘解由左衛門にあてた書状があり、北村氏を城主と考えるが、この書状の年代が天正四年（1576年）となっており、16世紀後半にも城は存在していた可能性はある。江戸時代と思われる遺物も若干あるが、堀の最終的な埋没期と考え、城が存続していたかについては言及することを避けたい。また、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ郭の構造が近世城郭への過渡期的要素をもつ可能性があるが、今後の検討課題としたい。

なお、報文作製にあたり、井上喜久雄氏、千田嘉博氏の御教示を得た。文末ながら記して謝したい。[14]

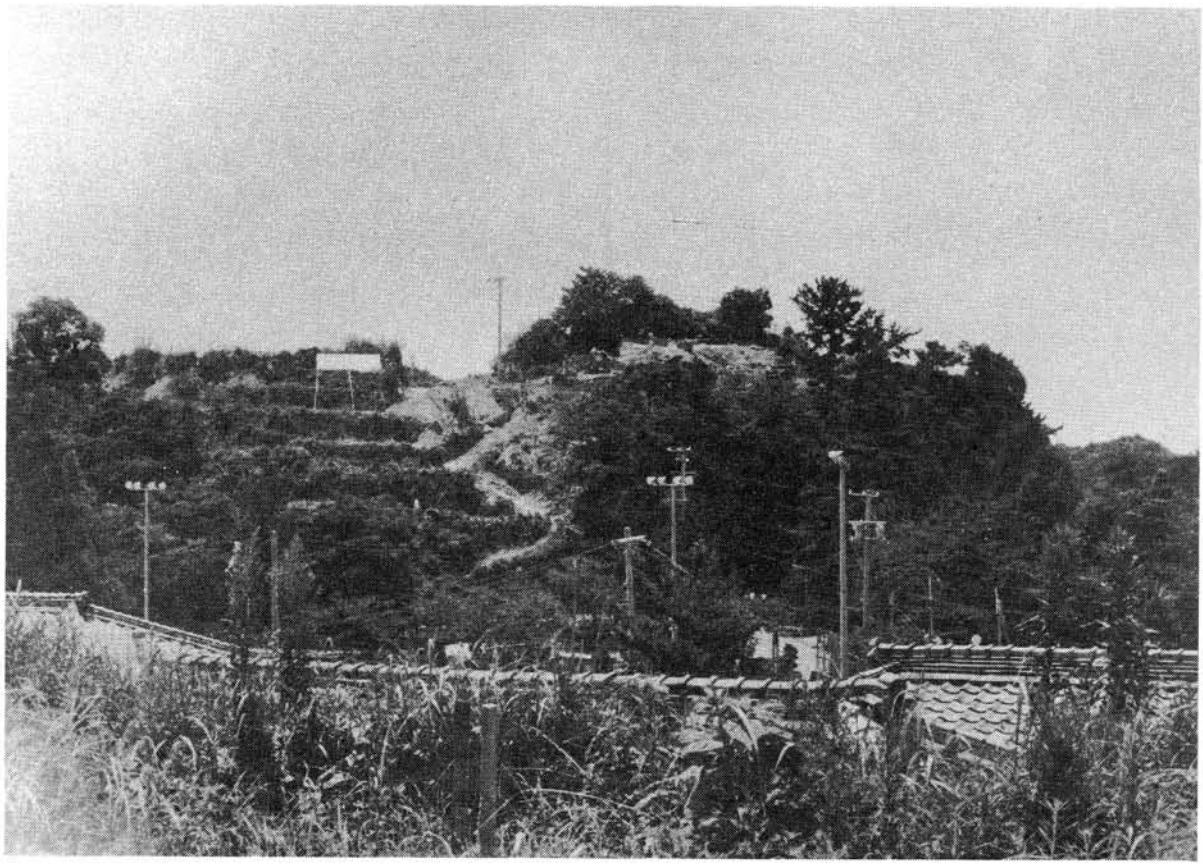
〈註〉

① 山沢義貴『ナゴサ遺跡発掘調査報告』南勢町教育委員会 1976
② 『ヒロサキ遺跡発掘調査概要』南勢町教育委員会　1984
③ 『宮山古墳発掘調査概要』南勢町教育委員会　1984
④ 福井県立朝倉氏遺跡資料館『一乗谷朝倉氏遺跡XIV』1984
⑤ 註①に同じ
⑥ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報６』1976
⑦ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報７』1977
⑧ 註③と同じ
⑨ 註②と同じ
⑩ 新田洋「平安時代～中世における煮炊用具－「伊勢型」鍋－に関する若干の覚書」（『三重考古学研究１』1985）
⑪ 愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅳ)』1985
以下、瀬戸産陶器類の編年観は本報告書によるものである。
⑫ 赤羽一郎「常滑焼－中世窯の様相－」（『考古学ライブラリー23』1985）
⑬ 楢崎彰一編『美濃の古陶』1976
⑭ 報告書作製にあたり多くの文献を参考にしたが主なものを以下に記す。

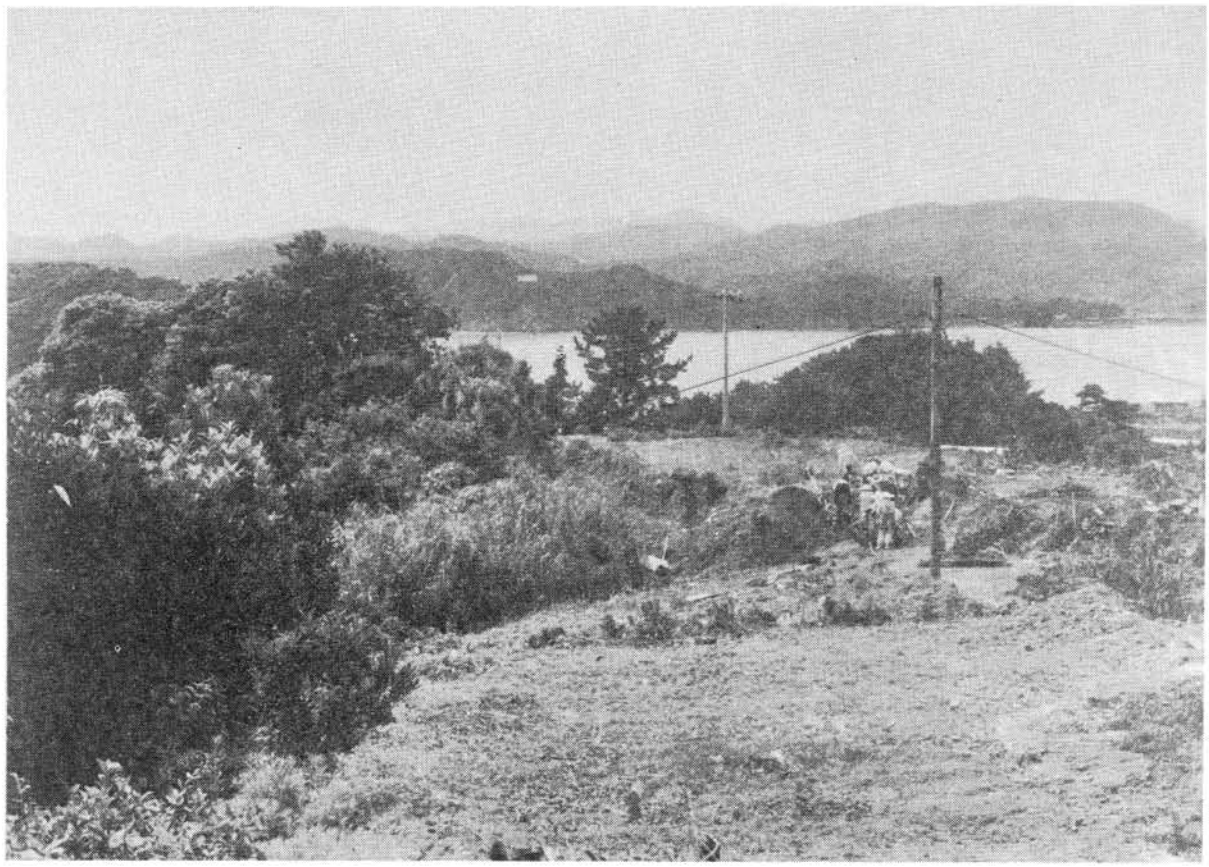
・『南勢町誌』南勢町誌編纂委員会　1985
・『三重県の地名』日本歴史地名大系24　平凡社　1983
・『角川日本地名大辞典・24　三重県』角川書店　1983
・『三重の中世城館』三重県教育委員会　1976
・『瀬戸市史　陶磁史篇一』瀬戸市史編纂委員会　1980
・『瀬戸市史　陶磁史篇二』瀬戸市史編纂委員会　1981

図　　版

航空写真

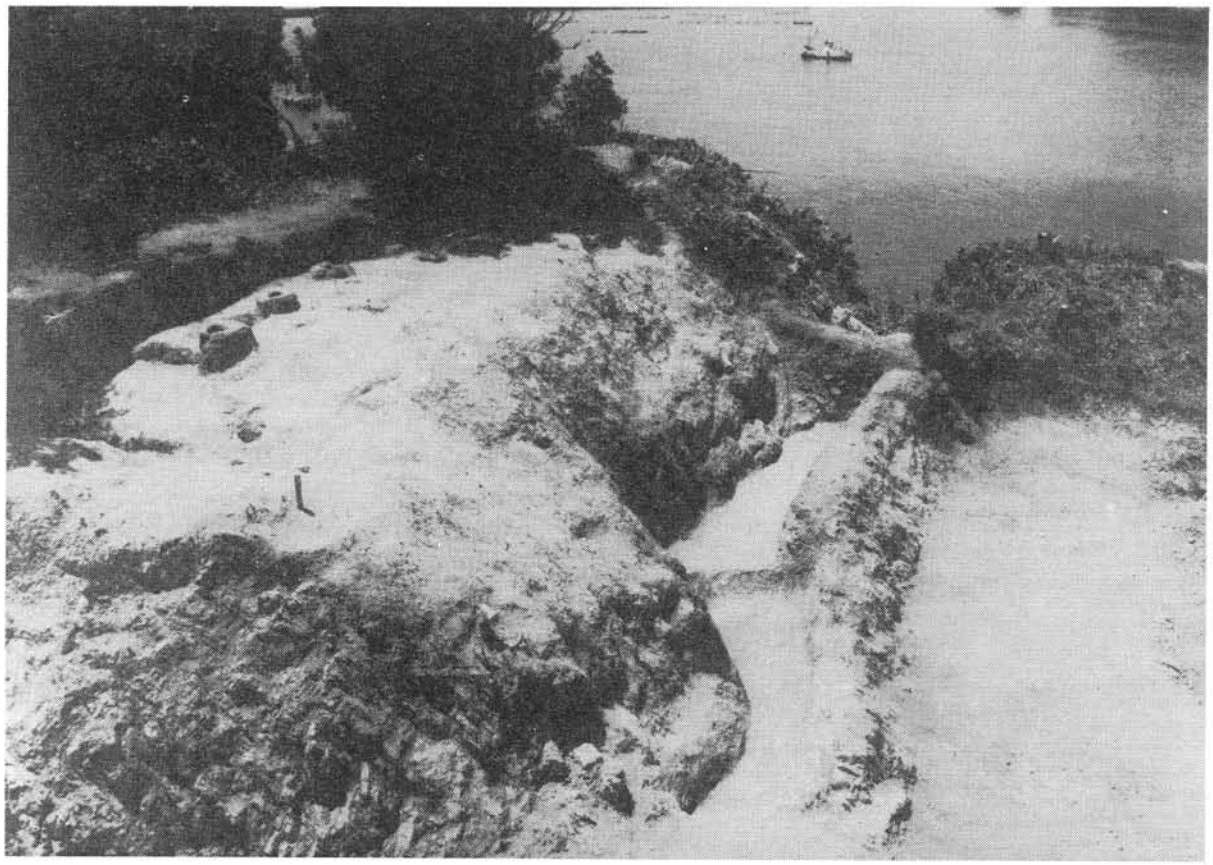


遺跡遠景（北から）

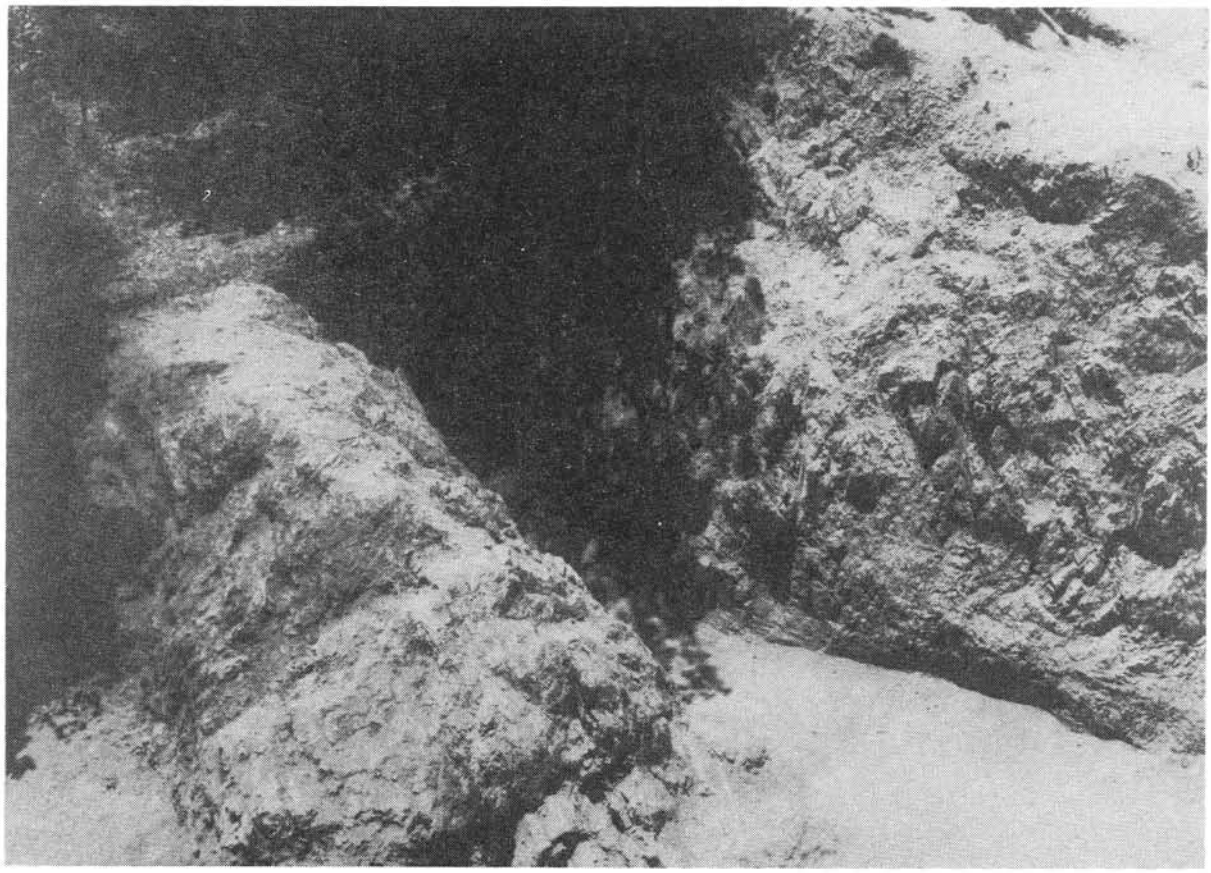


遺跡近景（東から）

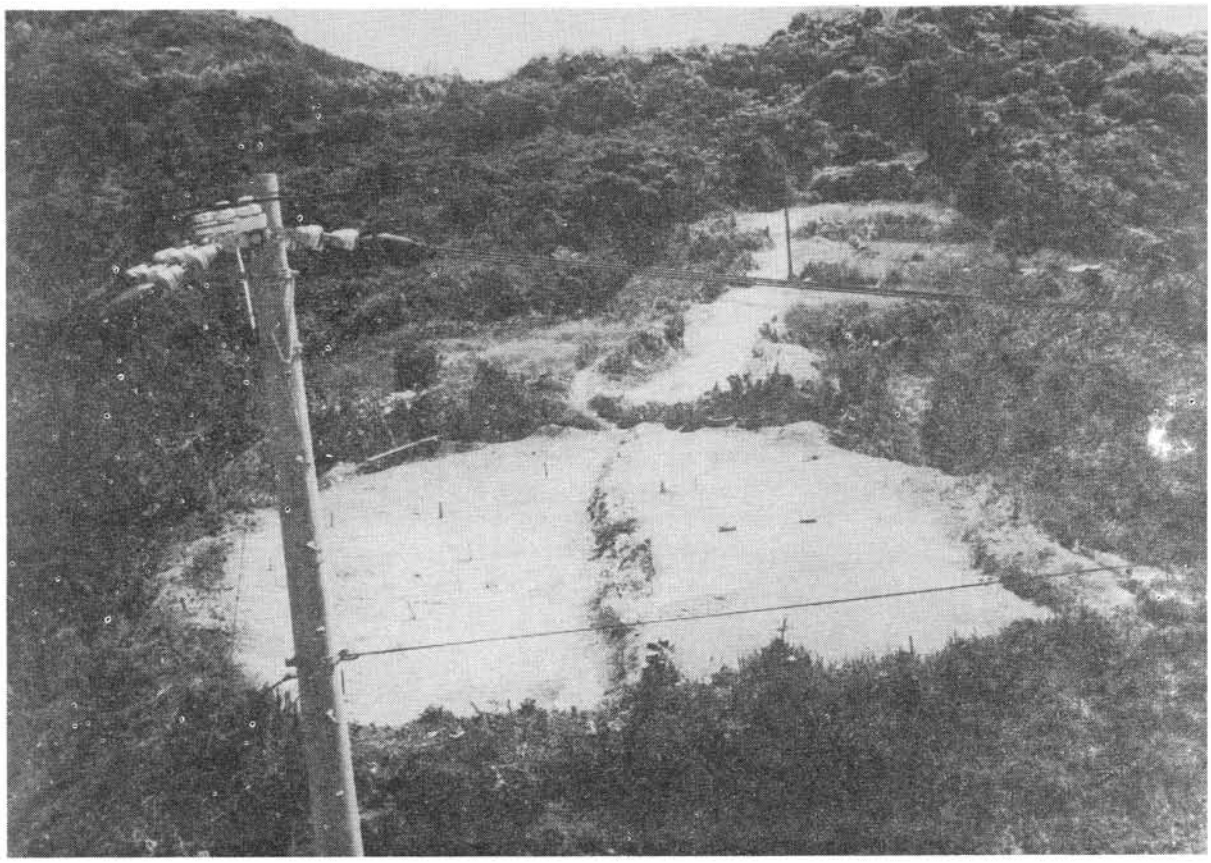
発掘調査風景



SA1・SD2・SD4（北東から）

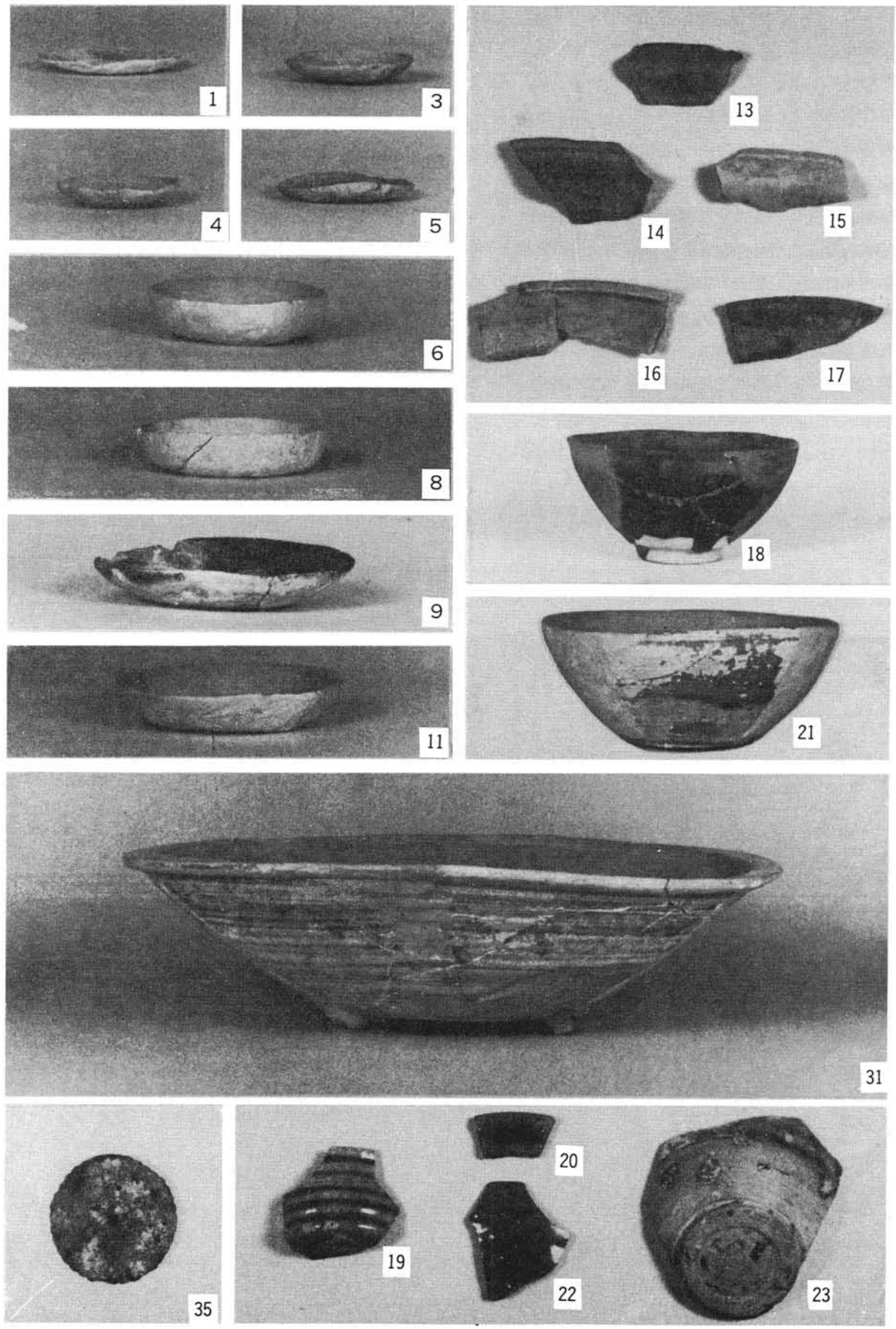


SD3（北東から）

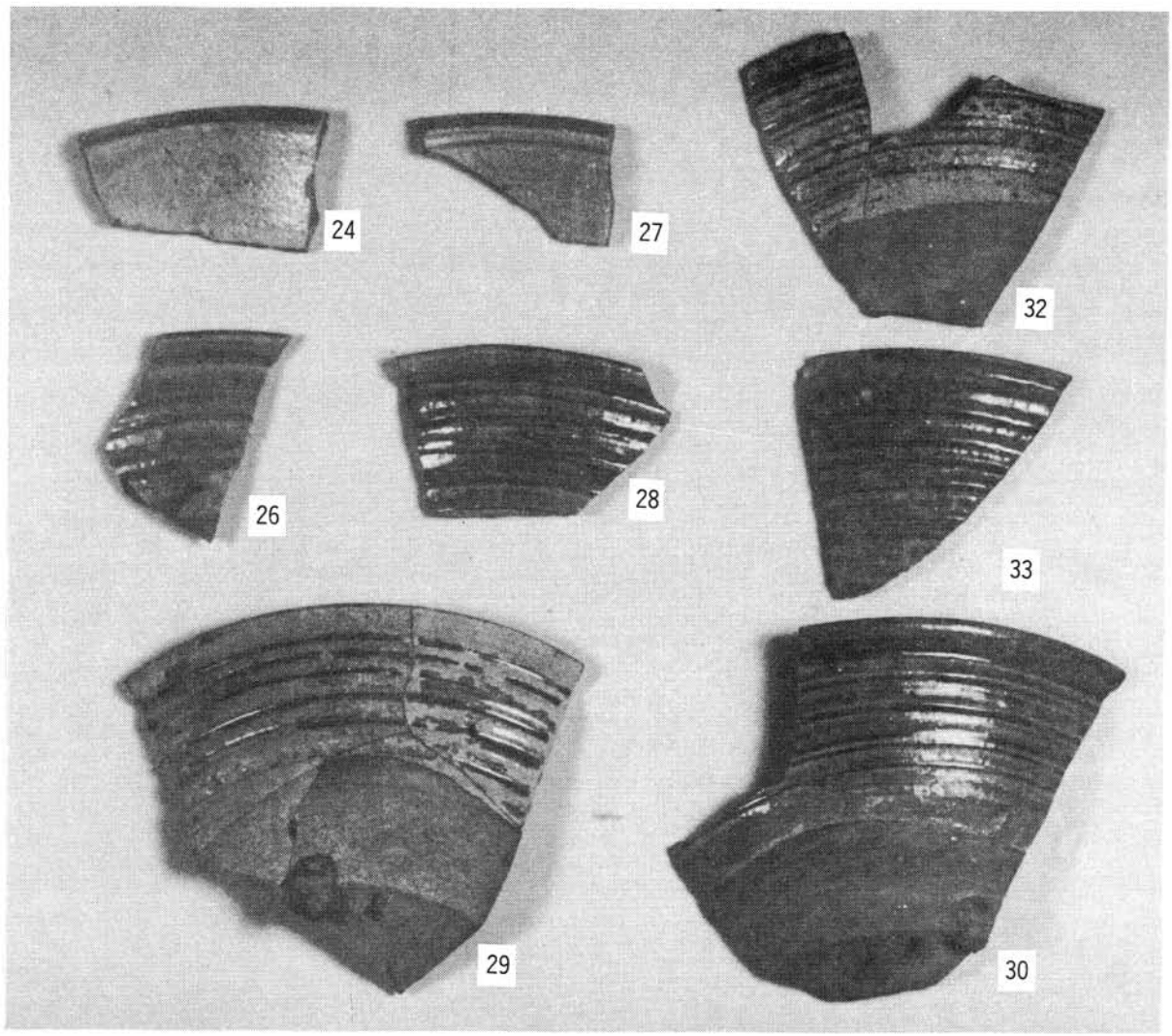


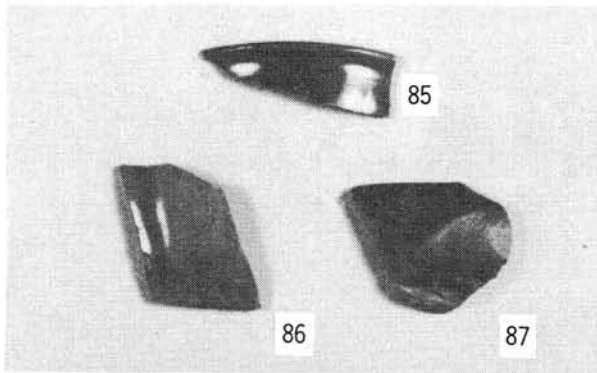
Ⅵ郭（西から）

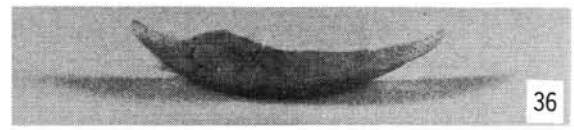
遺物出土状況

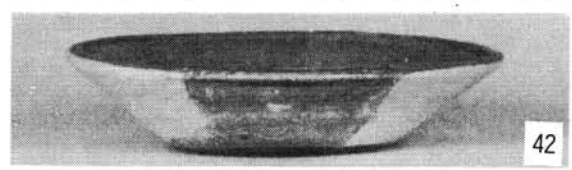


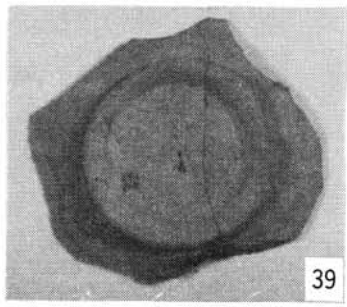
出土遺物（1：3）

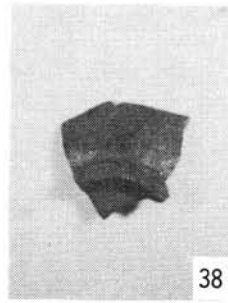


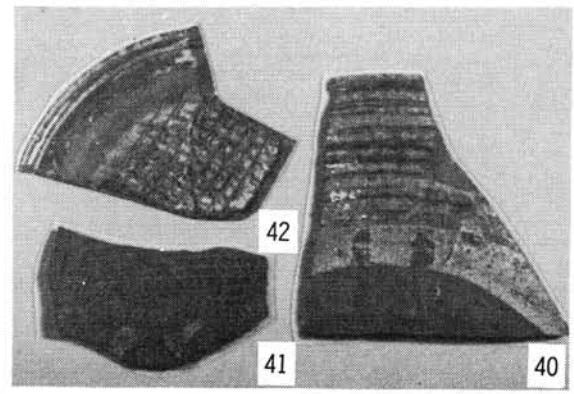




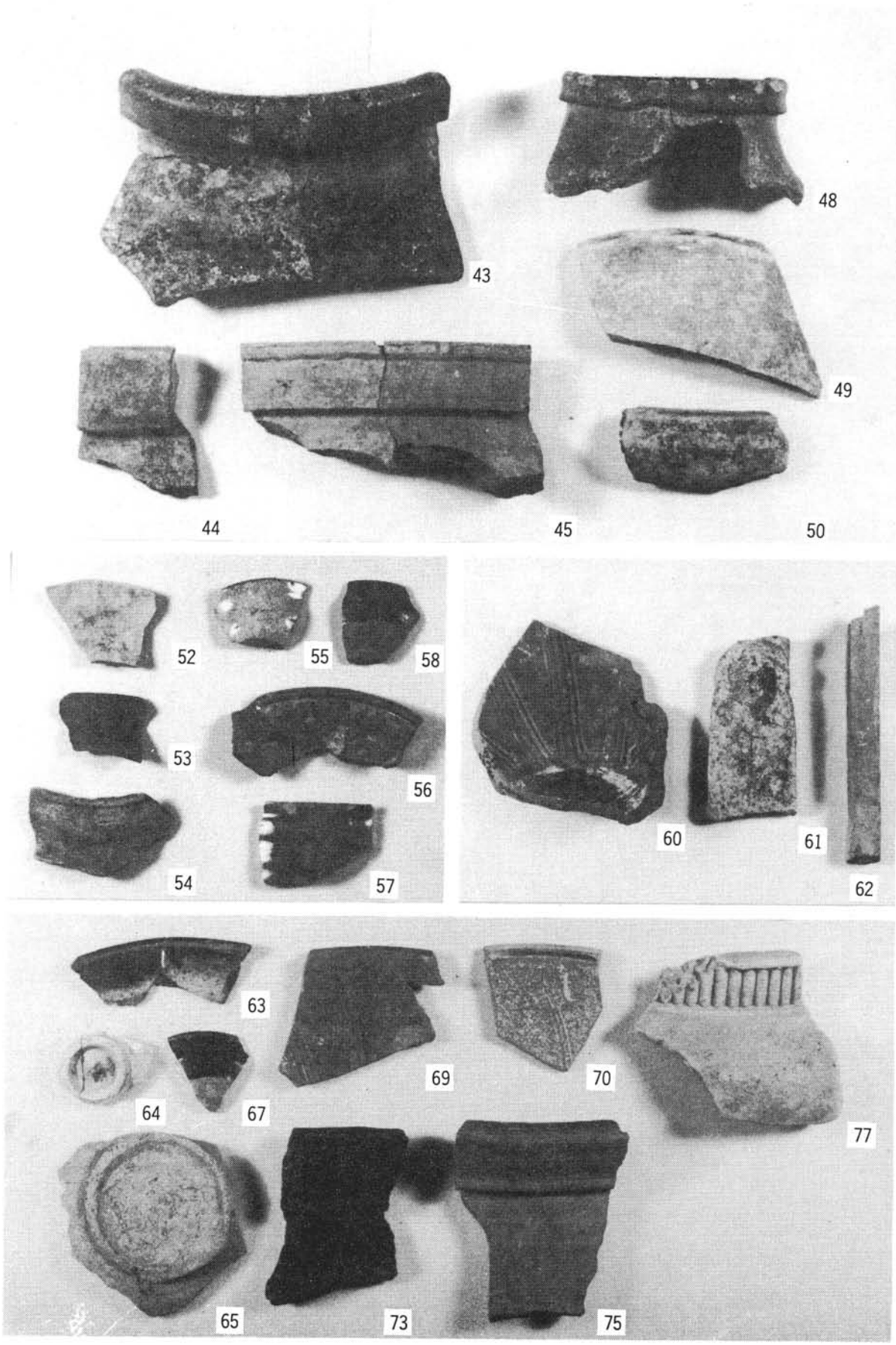








出土遺物（１：３）


43
48
49
44
45
50
52
55
58
53
56
54
57
60
61
62
63
69
70
64
67
77
65
73
75

出土遺物（1：3）